

上野原遺跡第10地点検出の「環状遺棄遺構」について

八木澤 一郎

A Ring-Pattern of Remains Left and Distributed as a Feature
Excavated in Uenohara Site no.10 Location

Yagisawa Ichiro

要旨

第10地点の象徴的存在にまでなった、対で並んで埋納された壺形土器をはじめとする埋納土器群には埋納方法に一定の規範がみられた。また土器埋納遺構と遺物出土希薄域とその周囲に広がる環状出土区域とには、同時性と継続性という密接な相関関係を持ちながら、意図的に形成され続けた状況が確認できた。そのうえで、環状出土区域内の数グリッド離れた地点で出土した土器片が数多く接合する原因として、「土器分置遺棄行為」と名付けることができる遺棄行為を想定し、その行為の結果である環状出土区域は、環状遺棄遺構という祭祀遺構であったと評価した。

キーワード： 縄文時代早期、祭祀遺跡、環状遺構

1 はじめに

筆者は、平成4（1992）年度から平成6（1994）年度にかけて、国分市上之段にある上野原遺跡第10地点¹⁾（以下、第10地点と略する。）の調査に携わる機会を得て、様々な形や大きさの土器や石器に接し、当時の人々がこれらの道具を作り分け、そして使い分けていたほど文化が発達していたことに、強い衝撃を受けた。特に、第10地点の象徴的存在にまでなった、対で並んで埋納された壺形土器をはじめとする埋納土器群の発見と、その区域では一般遺物の出土数が極端に激減する状況が明らかになるにつれて深い感動を覚えた。これらの状況については縄文早期後葉期における上野原遺跡の特徴として、様々な機会に語ってきたところである²⁾。

その一方で、遺跡の解釈については大変とまどっていたことも確かであった。そのような中、平成7（1995）年度からは整理作業を経て、報告書刊行まで一貫して携わる機会を得た。その成果として、土器群の編年の位置付けや、早期後半期における上野原遺跡の性格に一定の解釈が行えるところまで、基礎的資料を積み上げることができ、平成11（1999）年度と平成12（2000）年度に報告書を刊行した³⁾。

またこの第10地点での成果を基に、南九州での縄文早期後葉前半期の土器型式編年を行い、そこから導き出された形式の違いに着目し、南九州における縄文早期後葉前半期の文化様相に迫ったところである⁴⁾。

本論はこの土器型式編年に基づき、第10地点の土器出土状況の変化から、当遺跡の性格について解釈を行うことを目的としたものである。

2 上野原遺跡第10地点例の検討

（1）概要

第10地点は、標高約260mの独立したシラス台地のうち南東側にあたる（第1・2図参照）。遺跡南側は鹿児島湾に至る急斜面となるが、中腹には湧水点や、集石遺構や石器の石材になる輝石安山岩の露頭がみられる。遺跡北側は緩斜面になり縄文早期前葉期の集落や、縄文早期中葉期の遺物集中出土区が広がる。

第10地点では縄文早期中葉期から後葉期の遺物が約15万点ほど出土した。これらの遺物は、約20cmから50cmほど堆積したアカホヤ火山灰の下層であるⅥ層やⅦ層から出土した（第3図参照）。調査においては分層発掘を行ったが、層序により、遺物の時期を細別することは出来なかった。

帰属時期が明確に判断できる土器では、大部分が早期後葉前半期に属していたことから、第10地点で主体となる時期は早期後葉前半期と判断した。

（2）遺物出土希薄域で検出された遺構の検討

さて、調査で特に注目されたのは、次の諸点であった。

まず、第10地点のうち最も標高が高い地点では、遺物の出土量が他の区域と比べて極端に少なくなる傾向がみられたことである（以下、この区域を遺物出土希薄域と称する）（第12図参照）。1区画40mグリッド（1600㎡）での総取上点数をみると、遺物出土量が多い区画では10,000点を大幅に超えるのに対して、遺物出土希薄域では1,000点余しか出土せず、10分の1の割合であった。しかも、出土遺物の多くは早期後葉前半期に属していたのに対して、遺物出土希薄域から出土した遺物の多くは早期後葉後半期に属し、時期が異なる遺物であることが後に判明した⁵⁾。

次に、遺物出土希薄域では特殊な遺構が数多く検出され